

森田茂先生の 作品28点が 故郷に里帰り



自宅アトリエで作品にむかう森田先生



「夜半の祭」2006年 第38回日展



「黒川能(松風)」2005年 第71回東光展



「下館みこし渡御」素描



「黒川能」素描

創作活動を知る 貴重な作品の数々 遺族が寄贈

文化勲章受章者で本市名誉市民の洋画家・森田茂先生（1907～2009）の遺作28点が遺族の柏木かおるさん、安増茂樹さん（共に東京都在住）からしもだて美術館に寄贈されました。日展出品作品を含む創作初期から晩年まで一連の代表作を集めており、日本近代洋画界最高峰の作品がこれだけの数をまとめて寄贈されるのは大変貴重なことです。

森田先生の作品は、力強い筆致の重厚な画風が知られていますが、寄贈された作品には、素描（デッサン）10点も含まれ、作品の創作過程などを伺い知ることができます。しもだて美術館では、平成22年度に特別展を実施する予定です。



洋画家 飯泉俊夫さん(小林)
日展評議員・審査員

この度、ご寄贈下された森田先生の油絵とデッサンに驚いている。「宵月の富士」を筆頭に、風景や下館のみこしや人物、黒川能など、時代の力作が心を強く打ち、壮観である。

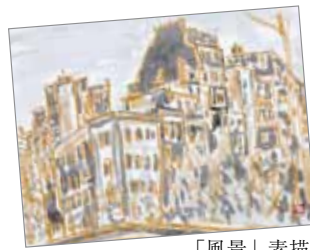
十八歳の年から絵を描きはじめ、八十数年間の修業で体得した作品は、あくまで深く高く、芸術のさわみを呈している。

ふりかえって、私は四十六年間、油絵を描いてきたけれど、この偉大な価値を理解できるには、まだ時を要するだろう。

とにかく、魅力的な絵であり、それぞれの作品は途方もなく高遠、高価である。何度でも美術館に足を運び、深い水底に沈潜しつつ輝きを増す森田茂の世界を鑑賞したい。



「祝膳のある静物」1961年 第2回水光展



「風景」素描



「文楽人形 男頭」素描

輝きを増す森田茂の世界 最上級の芸術を楽しんで

森田茂 Shigeru Morita

明治40年に下館市本城町に生まれる。下館尋常高等小学校に学び、大正14年、茨城県師範学校を卒業後、画家を志して上京。昭和9年、帝国美術院展覧会に「神楽獅子の親子」が初入選。昭和13年には、第2回新文展に「金蔵獅子」が特選となり、同作品はイタリア首相に贈呈される。昭和41年「黒川能」が文部大臣賞を受賞。昭和45年、改組第1回日展出品作「黒川能」で日本芸術院賞を受賞。昭和52年、勲三等瑞宝章を受章。平成元年には、文化功労者、平成5年には茨城県内で3人目、筑西市としては、陶芸家・板谷波山に次いで2人目の文化勲章を受章。平成21年3月、101歳で逝去。



「黒川能 鼓方」素描

生前、郷里に恩返しをしたいと言っていたので、祖父も喜んでくれていると思います。祖父は90歳を過ぎたころから車イスの生活になりましたが、創作への意欲は衰えることがなく「何としても絵を描きたい」と、ひたすらキャンバスへ向かう姿が忘れられません。ライフワークであった黒川能や富士山などの代表作はもちろんですが、常に新しい技法や作風を学んでいたスケッチもぜひ、ご覧いただきたいです。しかもだて美術館には、祖父の初期から晩年までの作品が揃っています。一人の画家の全体像を感じてもらえたらうれしく思います。

柏木かおるさん 画家森田茂の魂を感じてもらいたい



作品を寄贈されたお孫さんの柏木かおるさん(左)と安増千明さん(寄贈者・安増茂樹氏夫人)